ペンテコステ礼拝説教「バラバラよりハラハラ」予稿
日本基督教団石神井教会　2019年6月9日

【旧約聖書日課】創世記　11章1～9節

1世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくいの代わりにアスファルトを用いた。4彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

5主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6言われた。

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

8主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。9こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

【使徒書日課】使徒言行録　2章1～11節

1五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、2突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。3そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しだした。

5さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、6この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。7人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガリラヤの人ではないか。8どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。9わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、10フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、11ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」

**【福音書日課】ルカによる福音書　11章1～13節**

1イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、
「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。
『父よ、
御名が崇められますように。
御国が来ますように。
3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。
4 わたしたちの罪を赦してください、
わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。
わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」
5また、弟子たちに言われた。「あなたがたのうちのだれかに友達がいて、真夜中にその人のところに行き、次のように言ったとしよう。『友よ、パンを三つ貸してください。6旅行中の友達がわたしのところに立ち寄ったが、何も出すものがないのです。』7すると、その人は家の中から答えるにちがいない。『面倒をかけないでください。もう戸は閉めたし、子供たちはわたしのそばで寝ています。起きてあなたに何かをあげるわけにはいきません。』8しかし、言っておく。その人は、友達だからということでは起きて何か与えるようなことはなくても、しつように頼めば、起きて来て必要なものは何でも与えるであろう。9そこで、わたしは言っておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。10だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。11あなたがたの中に、魚を欲しがる子供に、魚の代わりに蛇を与える父親がいるだろうか。12また、卵を欲しがるのに、さそりを与える父親がいるだろうか。13このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」

***本日の説教は、「合同礼拝」のため、予稿とは異なる場合があります。***

## 「父よ」と祈る教会

わたしたちが普段の礼拝の中で「主の祈り」を唱えるのは、終わり近く、献金に続く奉献讃美の後です。今日は、その前に今、福音書日課と讃美の歌で「主の祈り」を聞き、また歌いました。

「天にまします我らの父よ」と、わたしたちはいつも少し難しい言葉で「主の祈り」を祈り始めます。けれども、今日の福音書日課で、主イエスは、もっと簡単に「**父よ**」と言って祈り始めるように、弟子たちにお教えになられます。どちらも主イエスがお教えになられたとおりですが、大切なのは「**父よ**」の部分です。

神を「**父よ**」とお呼びする。それは、わたしたちが「神の子」であるということです。「自分は神の子だ」と分かっていなくても、「父よ」と神をお呼びする祈りの言葉を、わたしたちは教会で教えられ、口にします。そして、そう祈るや否や、「あなたも神の子です」と呼ばれる。それが教会というところなのです。

**天から降って来られるとき**

皆さん。今日はペンテコステ、聖霊降臨の祝いの日です。子どもたちもおとなの皆さんも、一つの礼拝に集められてきました。いつもは 9 時からの CS 礼拝と 10 時半からの主日礼拝に分かれて別々の礼拝に集まっているわたしたちが、今日は一つに集まっています。

6 月第 2 日曜日は毎年、「こどもの日・花の日」と呼んで、このような合同礼拝をしていますから、今年もそうしたのです。今年は、「ペンテコステ」の祝いの日と重なりました。本当は、どうしようかと思いました。「ペンテコステ」の祝いの礼拝は、特別なときです。主日礼拝では「洗礼式」も「聖餐」もあります。CS 礼拝の倍近く時間がかかりますし、「聖餐」のパンと杯にはあずかれない子どもたちも少なくありません。別々にしたほうが良いかなとも思いました。けれども、最後は聖書にあるとおりにしようと決めました。二千年前、弟子たちの教会が祝ったペンテコステ＝**五旬祭の日**、皆、**一つになって集まってい**ました。バラバラにではなく、いくつかに分かれてでもなく、皆が一つになって集まっているところで、わたしたちの祝うペンテコステの祝いは、始まったのです。そうであるならば、わたしたちも皆が一つになって集まってこそ、本当にペンテコステらしいペンテコステの祝いをすることになるのではないでしょうか。

そのとき、120 人ほどの弟子たちが集まっていたといいます。ちょうどわたしたちのいるこの礼拝堂がいっぱいになるくらいの人数です。あの十二使徒と呼ばれる弟子たちも、その中にいました。イスカリオテのユダが一人欠けていましたが、代わりの使徒が一人選ばれていました。そこには、主イエスの母マリアや兄弟たちも一緒にいたといいます。そのほかの女の弟子たちも一緒にいました。120 人の弟子たちの中には、老若男女いろいろな人がいたはずです。もしかしたら、女の弟子の中には小さな子どもを連れている人もいたかもしれません（もちろん、父親が子どもを連れて来ていてもよいのですが、聖書の時代にはそういうことはあまりなかったようです)。

その 120 人の人たちは、どんなにか熱心な弟子たちだったのでしょうか。この人たちは**心を合わせて熱心に祈っていた**（使 1:14）といいます。わたしたちは、この礼拝堂いっぱいに集まって、心を合わせて熱心に祈るということが、どれほどあるだろうかと思います。大勢が集まっていても、心がバラバラのことがあるのではないかと心配になります。人数が少ないときでさえ、いつも心を合わせることができているとは思えないことがあるのですから。

けれども、皆さん、安心してください。神は、わたしたちが一つに集まっているところには、おいでくださるのです。ペンテコステの弟子たちのところだけでなく、バベルの塔を建てるために集まっていた人たちのところにも、神は天から降って来られました。今、わたしたちが互いのことを良く知らなくて、心を合わせるということがうまくできていなくても、神はここに、わたしたちが一つに集まっているところに、おいでくださっているのです。わたしたちがお呼びしなくても、神は、わたしたちの集まりに必ずおいでくださるのです。

**《聖霊》は《一つ》**

そのことに、わたしたちは、気が付いていないかもしれません。ここが教会でなければ、「自分たちは自分たちの都合で集まってきているけれども、神さまをお呼びしたつもりはない」と言い出す人があるかもしれません。いいえ、教会にも、「神さまのことは、必要なときにお呼びするから、普段は放っておいてほしい」と思っている人がいるかもしれません。わたしたちが幾人かででも集まるとき、いつもそこに神がいらして、わたしたちの口にすることでも行うことでも全部ご覧になられているとしたら、それは困る、と思う人はいるでしょう。

もしかすると、わたしたちは、一人でいるときよりもむしろ誰かと一緒にいるときのほうが、神のことを忘れて、神のお喜びになられないようなことをしてしまいがちなのかもしれません。一人であれば、神のお喜びになられないようなことをしたり考えたりしてしまったときに、立ち止まって考え、神のことを思い出して行動や考えを改めることができる人でも、誰かほかの人がいると、ついつい周りの誰かに合わせたり、逆に反発したりとなって、神のことを忘れたまま、考え続けたり、行動を起こしたりしてしまう、ということがあると思います。

だから、かもしれません。神は、わたしたちが一つに集まっているところには、必ずおいでになられるのです。そして、神は、一つに集まっているわたしたち一人ひとりをバラバラに区別して、一人ひとりが違う言葉を話すようにされ、そして分かれ分かれに散らされる、というのです。バベルの塔の物語は、そういう話でした。最初のペンテコステの出来事も、実は、同じです。一つに集まっていた弟子たちのところに、神が「聖霊」で降って来られると、皆はそれぞれに異なる言葉で話し出しました。そして、この後、弟子たちは分かれ分かれにそこから出て行くようになるのです。

ただ、ペンテコステの弟子たちと、バベルの塔の人々には、違うところがありました。バベルの塔の人たちは、神が降って来られて皆が異なる言葉を話し始めると、その神を避けるようにして、そこから離れて行きました。一方、ペンテコステの弟子たちは、聖霊の神が降って来られると、その聖霊を自分の中にお迎えしたのです。いいえ、むしろ、こういうことかもしれません。そのとき弟子たちは、自分たちの集まっているところに聖霊の神がおいでくださっていることを知って、お互いに言い合ったのです、「聖霊の神が、あなたの上にとどまっていますよ」、「聖霊の神が、あなたを満たしてくださっていますよ」と。

わたしも、皆さんに、そう言いましょう、「聖霊が、あなたの上にとどまっています。聖霊が、あなたを満たしてくださっています」と。

聖霊を与えられたわたしたちは、バラバラに見えても、一つの思い、神の御心を共にしています。それぞれが神の御心によって、異なる一人ひとりとして生きながら、なお互いに結び合うことができます。お互いのことをハラハラと心配しながら見ていても、お互い聖霊に満たされているのですから、安心して待つことができます。そう、わたしたちは、皆が同じ一人の神の聖霊と共にいることを、「父よ」と声を合わせてお呼びし祈るたびに、思い起こすのです。